アドホックな公共建築　- 三原市鷺島を対象として -

Ad hoc common architecture　-For Sagi Island, Mihara City-

多くの公共建築は、行政が公共サービスとして整備・提供した空間であるがゆえに、使い手が一方的にサービスを受けるだけにとどまり、人々の偶発的な出会いや個性ある振る舞いがあまり見られない。

鷺島の施設である「みなと茶屋」は使い手の個性が光る公共空間として私の目に映った。もとはタバコ屋さんだった空き家を、島の人たちが協力して改築してきた建物である。当初はお食事処であったが、農産物が買える「自由市場」や島のお土産の販売所、船の待ち時間の休憩所など、ボランティアで運営する島民によって年々用途を変えながら柔軟に活用されていた。

参加者の個性によって変化するアドホクラシー的な公共空間は、ある意味では行き当たりばったりな方法だが、最初から目的を決めず場合に応じて変化することで冗長性をもっている。使い手を巻き込み、自ら空間をつくり変えていく手法に、これからの公共建築のあり方を見ることはできないだろうか。

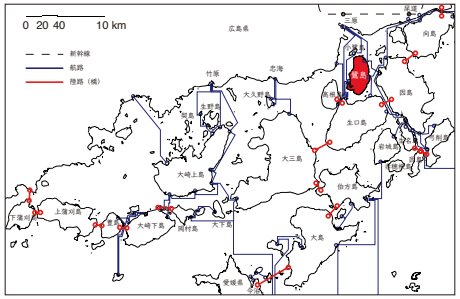
個性が光るみなと茶屋

鷺島名物パン屋さん

□1. 対象地：広島県三原市『鷺島』

対象地は広島県三原市に位置する鷺島である。南北長 5km、東西長 2km で、1 周 12km ほどの大きさで、三原駅からフェリーで 15 分程である。しかし、本土からのアクセスが海運に限られ、人口はこの 50 年で約 3000 人から約 600 人へと減少し、高齢化率は約 70% と超縮小かつ高齢化の局面を迎えている。

鷺島は、三原市に近い北端の「鷺浦」、大島を望む「須の上」、南端の「向田」の 3 つの集落で構成される。島には農協以外の商店は存在せず、島民の多くは自立的で小さな生業を持ち、それら生業を介して恒久的なコミュニティが構築されている。近年は NPO である三原市地域おこし協力隊員を中心に、島民でない人たちも巻き込み、島を盛り上げようと奮闘している。島の生業を体験するイベントに取り組むほか、地産品を使った商品の開発行っている。夫婦が営むパン屋さん 1 つをとっても島の重要な生業であり愛されている。



△瀬戸内海に位置する離島と交通

△島の生業とその風景（写真 A）

□2. 私（＝よそ者）の視点を通した島の魅力的な風景とその記述

私が離島に滞在して感じた主な魅力に『自立的で小さな生業に基づいた公共性』と『住民の暮らしにおける創意工夫』があげられる。滞在中に魅力的な風景の写真を撮り集めたが、その多くはこの 2 つが読み取れる風景であった。『自立的で小さな生業に基づいた公共性』が読み取れる風景は□1 で示した写真 A である。また、『住民の暮らしにおける創意工夫』が読み取れる風景を下に示した。これら風景は、都市には見られないささやかな風景であり、その多くは土地の環境や産業との深い結びつきによって現れている。そこで環境を知る手がかりとして、風景を構成する「アドホック的工作物」(※ここでは建築より小さいが手の加わったものと定義する）を現地の人のヒアリングや歴史文献をもとに読み解いた。その記述を写真の下に示している。

△住民の暮らしにおける創意工夫（写真 B）

A

急勾配のみかん畑の風景。みかん畑の傾斜を計測したところ 12-18° が多かったが、写真のみかん畑は勾配が 25°であった。栄養価の高いみかんには日当たりと水が必要不可欠であり、かつては山の上まで斜面一帯がみかん畑であった。石垣や海によって照り返された太陽光を利用することで甘みが凝縮されたみかんを作ろうといった知恵である。しかし近年は、高齢化に伴い耕作放棄されたみかん畑が多く存在する。昨年、島に新たに羊を迎い入れ、放牧することで雑草を食べてもらい労働量を減らす工夫も行っている。島の多くは 2 つの山で形成されているためほとんどが急峻な土地であり、花崗岩による土壌で形成されているため水持ちが悪く畑作に適していなかった。それゆえ、温暖な気候に適するみかんの生産が盛んになったことが推測される。

B

タバコ・芋を乾燥させるために燃料を燃やしたときに出る煙を、屋外に排出するために棟をまたいでつくる煙だし越屋根が特徴。中ではタバコの乾燥が行われており、鉄骨を床上に配置し、その内部に熱風を循環させ、乾燥小屋の室内を高温乾燥状態にする装置のような機能を持つ。広さ 2 間 4 方程度の青の高い小屋であり、火力乾燥の効率を上げるために機密性の高い土壁が用いられている。収穫された葉タバコは 1 枚ずつ縄に編み込み、6 段に吊り下げて乾燥させていた。燃料は戦後まもなくは薪を利用していた。乾燥室の役割を終えた後、外壁にトタンを貼ることで即席的な修復を施し、住まいとしてのシェルターに利用されていた。小さな地窓と観測窓のほかは極力設けず、自然対流によって熱を内部全体に伝わらせるための工夫が施されている。

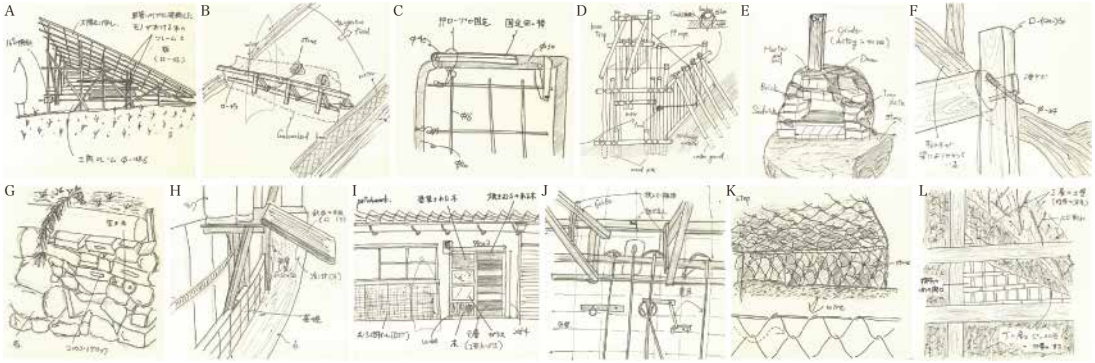
C,D

イノシシよけとして、フェンスに当たると音がなるよう柵にビールの缶を刺している。同一な缶は綺麗に整列し、アドホックの工作物として風景を構成している。もともとはこの島にイノシシはいなかったが、2004 年の生口島の火災によって、イノシシが海を渡って泳いできたことをきっかけに増加した。それゆえ、かつて島中に栄えていた芋の生産は年々減少した。獣害として認識されていたイノシシも、近年島では臭みの残らない処理方法が発達し、その肉が島の食卓に並ぶようになってきた。また、山の麓には D のような島の間伐材や竹を利用した捕獲器なども開発され、人間との共存を図っている。

□3. アドホック的工作物を手がかりとした設計手法

「アドホック的工作物」はあり合わせの材料や流通材、またそれらの組み合わせによってつくられている。由来の異なる様々な部材が巧みに転用され、即物的に組み立てられている点から、それらをアドホック的工作物と呼ぶこととした。それらからは、使い手による『モノ』の読み替えを行った上での的確な選択と配置が見て取れ、仮設的だが機能性や耐久性に配慮されたデザインであることが多い。地域によってそのあらわれ方は異なり、結果地域に個性を与えている。

こうした環境に合わせて使い手で形や用途を変えていくような柔軟性を、公共建築に応用できないだろうかと考えた。建築をつくり変える行為が人を巻き込み、知恵が使い手で共有され、生まれる空間には個性が吹き込まれるであろう。



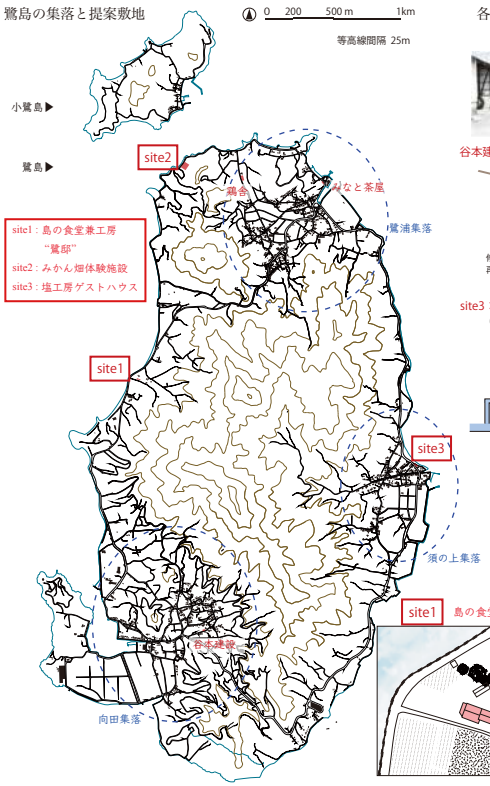
A: 太陽光パネルの下の休憩所　B: 廃棄材のイノシシ侵入止め装置　C: みかん畑のブリコラージュ扉　D: 竹と木材のイノシシ捕獲器　E: 漂流物を利用した自作釜　F 自然の松と一体化した柱梁
G: 空き缶・ブロック・丸太のハイブリッド石積み　H: 隙間を利用した置き場　I: 規格のサッシに合わせて作られたドア　J: 継ぎ足し梁を利用した物掛け　K 敷き詰め石の階段　I 土壁の換気窓

□4. 島の生業を連関させる新たな施設

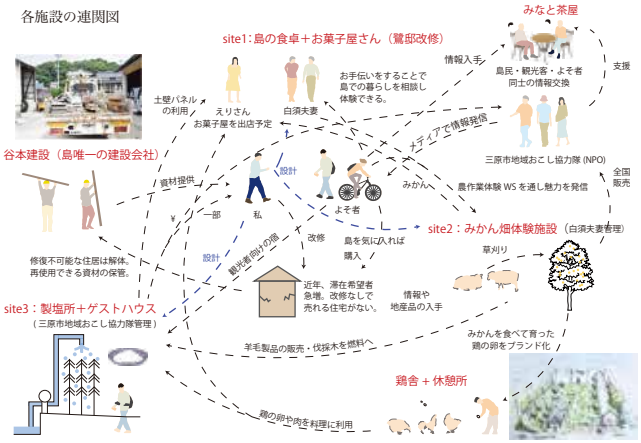
島には豊かな自然があり、それを産業とするための働く場所もあるが、過疎化と少子高齢化が進んだ地域の税収では公共空間の維持が難しい。また、高齢化と後継者不足によって島特有の技術や、かつて栄えた産業も少しずつ失われている。島外には、島特有のゆったりとした空気感や生業に魅力を感じている人は多い一方で、島への移住を考えている者の中には、これまで関わりのない新しい地域社会に突然飛び込むことに不安を覚え躊躇う者も少なくはない。

こうした背景を踏まえ、本設計のプログラムは生業のための空間を肥大化し、島民だけでなく観光客やよそ者も島時間を過ごせるような公共建築を 3 つ提案する。よそ者を呼び込むことで、使われ方の冗長性を獲得させる。建築行為自体も 1 つの生業であると捉え、使い手によって建築自体がプログラムとともに、上書きされていくことを考える。

鷺島の集落と提案敷地



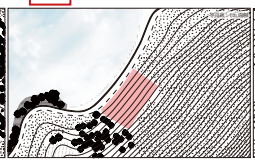
各施設の連関図



その場所だからこそ成り立つ「アドホックな公共建築」を 3 つ提案する。
それは、島の生業の拠点であり、誰でも島時間を過ごすことのできるものである。
特殊な技術を用いずアドホックに手を加えていくことができるものとし、島の環境を最大限に活かした設計を行う。
これら施設は、島の他の施設との関係の上で成り立っており、その関係を上図に示した。

site1　島の食堂兼工房 “鷺部”

site2　みかん畑体験施設



site3　塩工房ゲストハウス

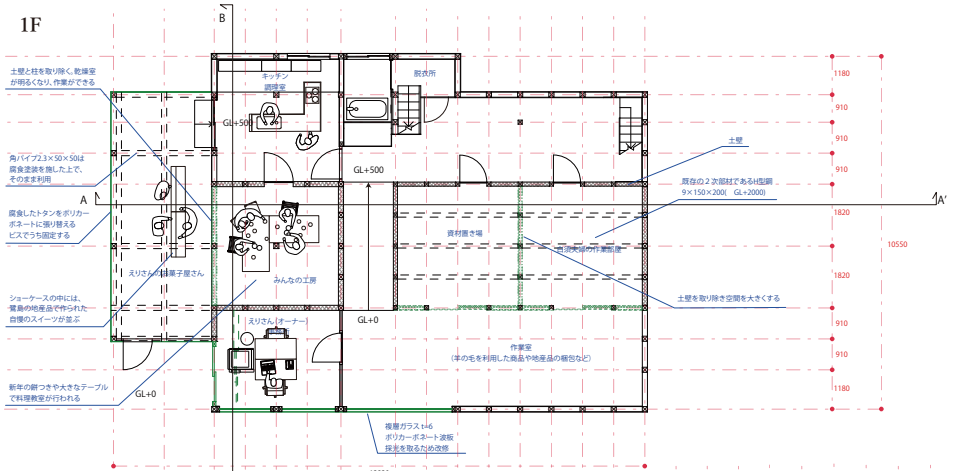
site1：島の食堂兼工房“鷺邸”

敷地1の鷺邸は、島民同士の食事や宿泊に利用される島の食堂である。鷺邸を営んでいる白須夫婦は長年島で暮らしており、地域おこしにも積極的に協力する顔の広い方である。

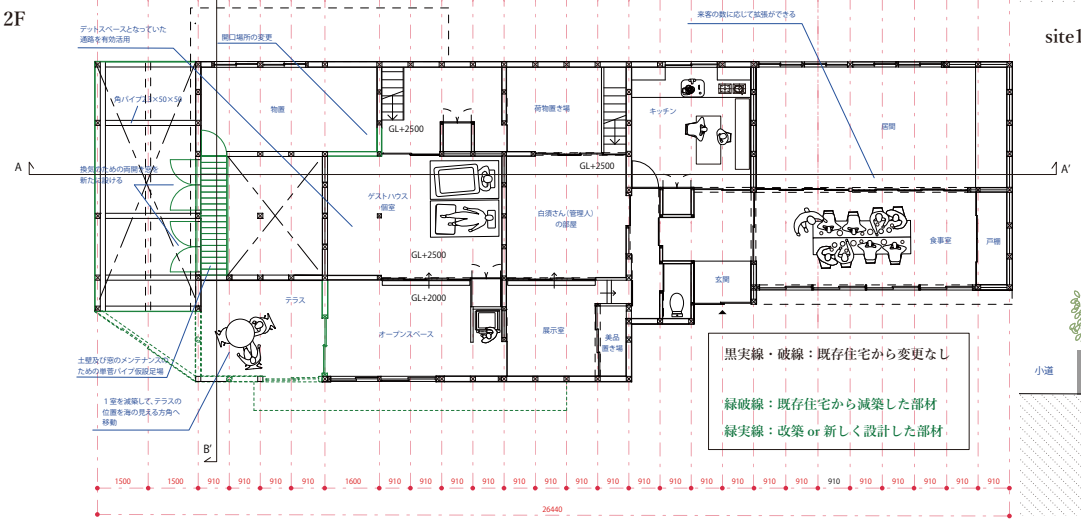
現在、鷺邸の使われていない地下を利用し、地域おこし協力隊に所属する方のための地産品を使ったお菓子屋さんや、島民たちで小物製品を作る工房をひらく計画を行っている。

site1：平面図（改修後）

1F



2F

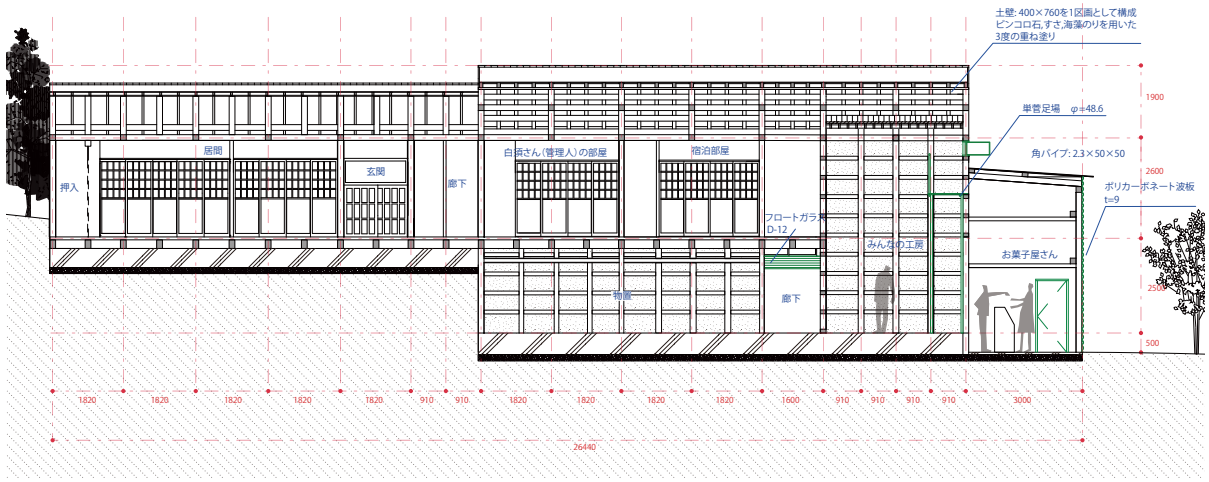


黒実線・破線：既存住宅から変更なし

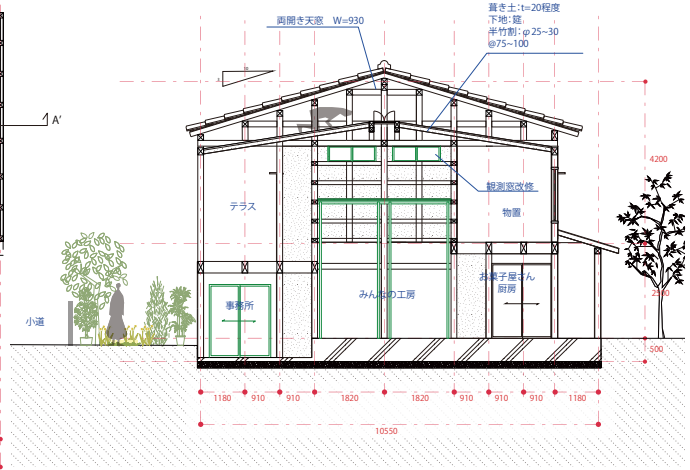
緑破線：既存住宅から減築した部材

緑実線：改築 or 新しく設計した部材

site1：A-A’ 断面図（改修後）



site1：B-B’ 断面図（改修後）



鷺邸改修箇所

テラス

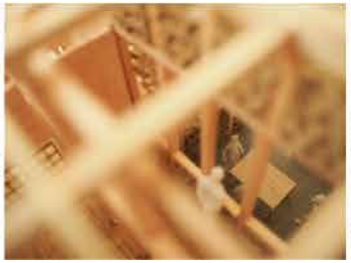
テラス下の庭側のファサード

海側の物置小屋のファサード

海側の土壁

壁に開口をつくり、テラスを解体移動したため
物置だった通路が明るくなり、
みんなで羊の毛を使った商品作り。

部屋を減築し、海側に移動したテラスから海を見る。



ゲストハウスの部屋からみんなの工房を見る。

海川の土壁を取り払い乾燥室が明るくなる。
乾燥室と隣接する空間のトタンをすべて
ポリカーボネートに交換し、お菓子屋さんに。

土壁の乾燥窓を拡張し、空気の循環を促す。
角形鋼管は防腐塗装を再度行い、そのまま利用。

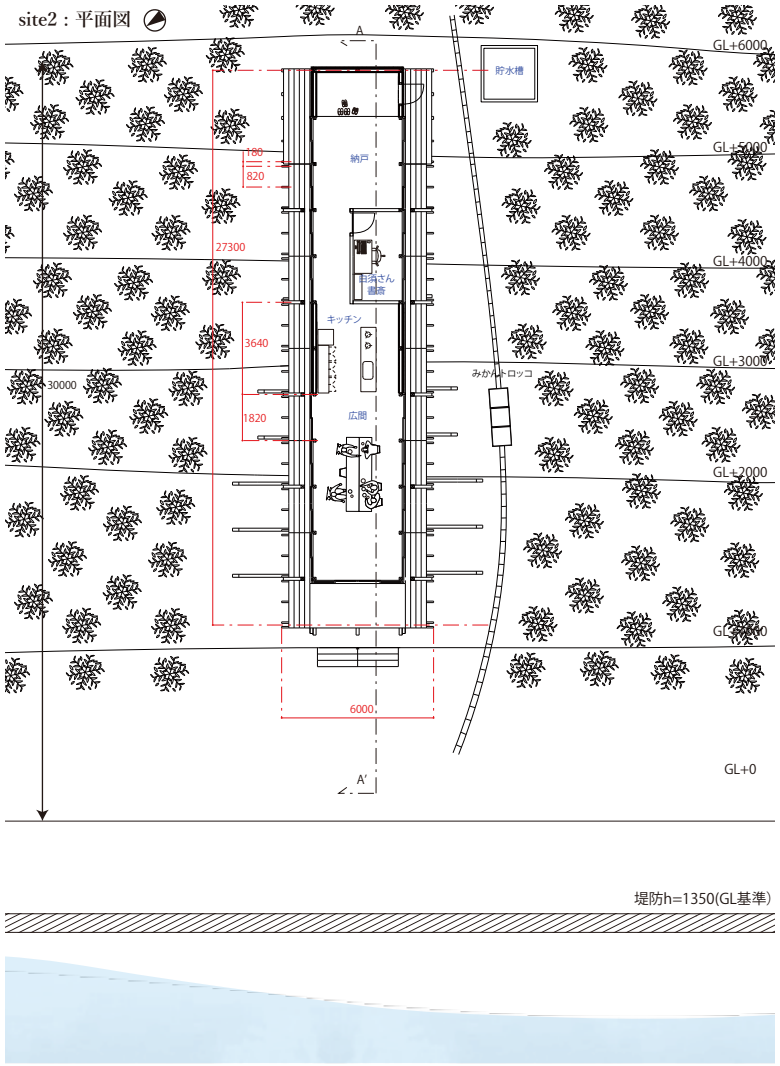
みんなの工房では島の皆で餅つきや料理を行ったり、
海の貝殻や羊の毛を使った商品製作がされる。

site2：みかん畑体験施設

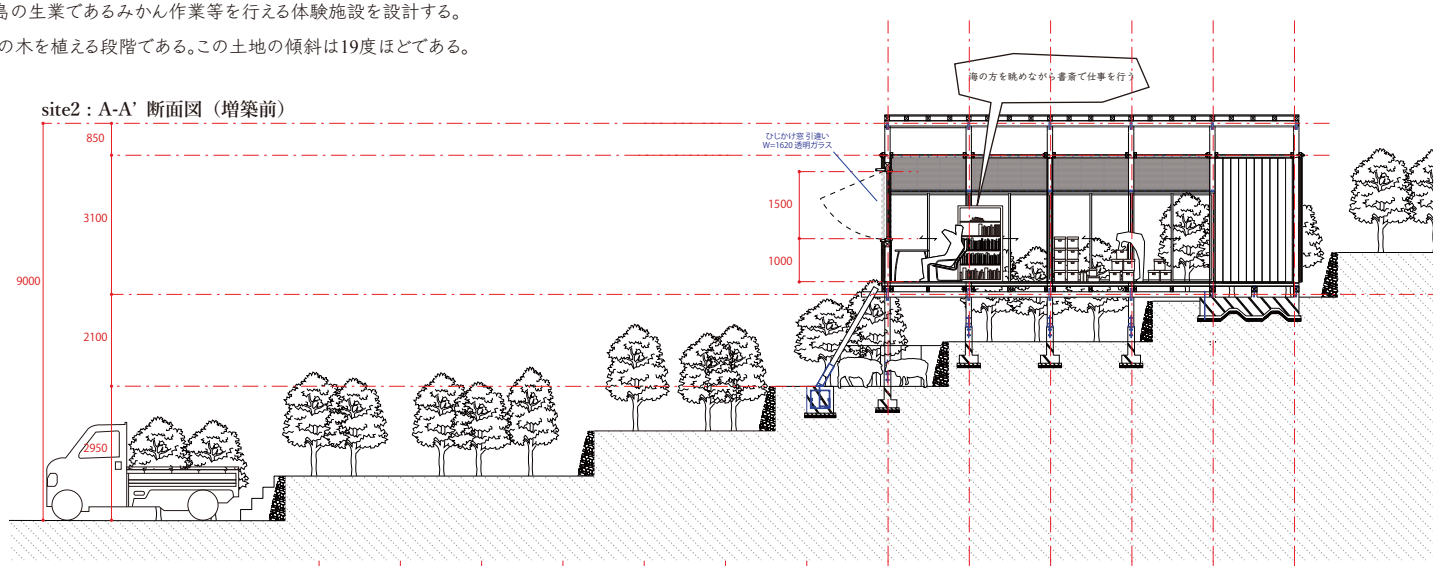
敷地2は白須夫婦の管理する土地であり、島に移住を考えている人や、島に訪れた観光客が島の生業であるみかん作業等を行える体験施設を設計する。

現在、耕作放棄された土地を羊の力を借りて綺麗にしており、これから地面をならしてみかんの木を植える段階である。この土地の傾斜は19度ほどである。

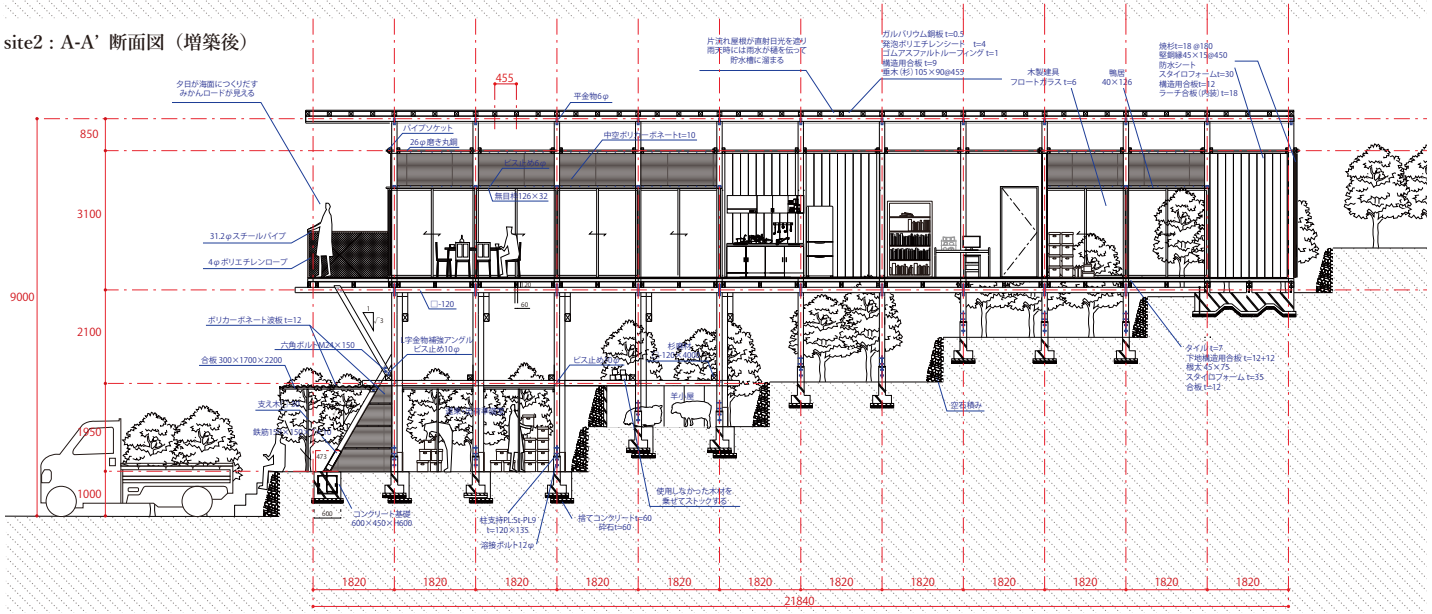
site2：平面図



site2：A-A' 断面図（増築前）



site2：A-A' 断面図（増築後）



よそ者・観光客はみかん狩りをはじめとした農作業を手伝い、島時間を味わう。

施設は展望台として観光客が訪れ、建物の中では、引き戸で涼しい風をとり入れてのんびり過ごし、みかんを味わうことができる。

建物からは夕方時に、夕日が作り出すみかんロードが見られる。

収穫されたみかんは、建物の下ではみかんが箱詰め・選別され、建物内で一時保管（される。

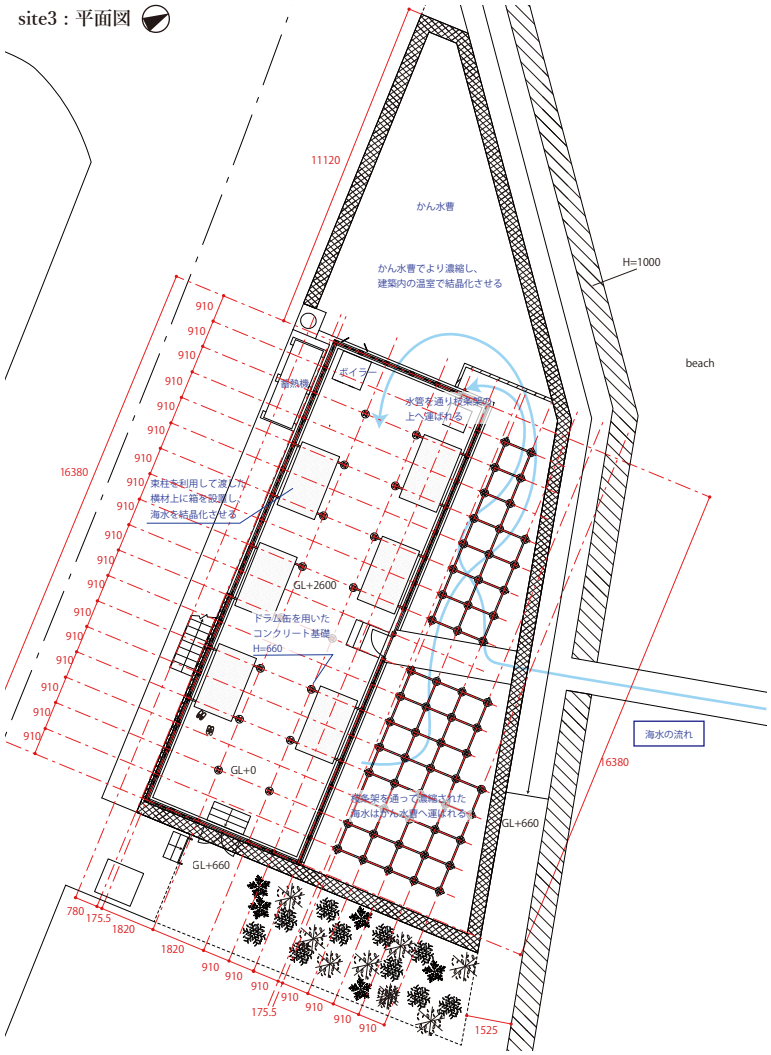
運び出されたみかんを集荷し全国へ。

縁側に座り綺麗に整列するみかん畑の美しい風景を見る。仕舞い後、羊たち（ミカンとレモン）が雑草を食べてくれるため、畑は綺麗な状態に保たれる。

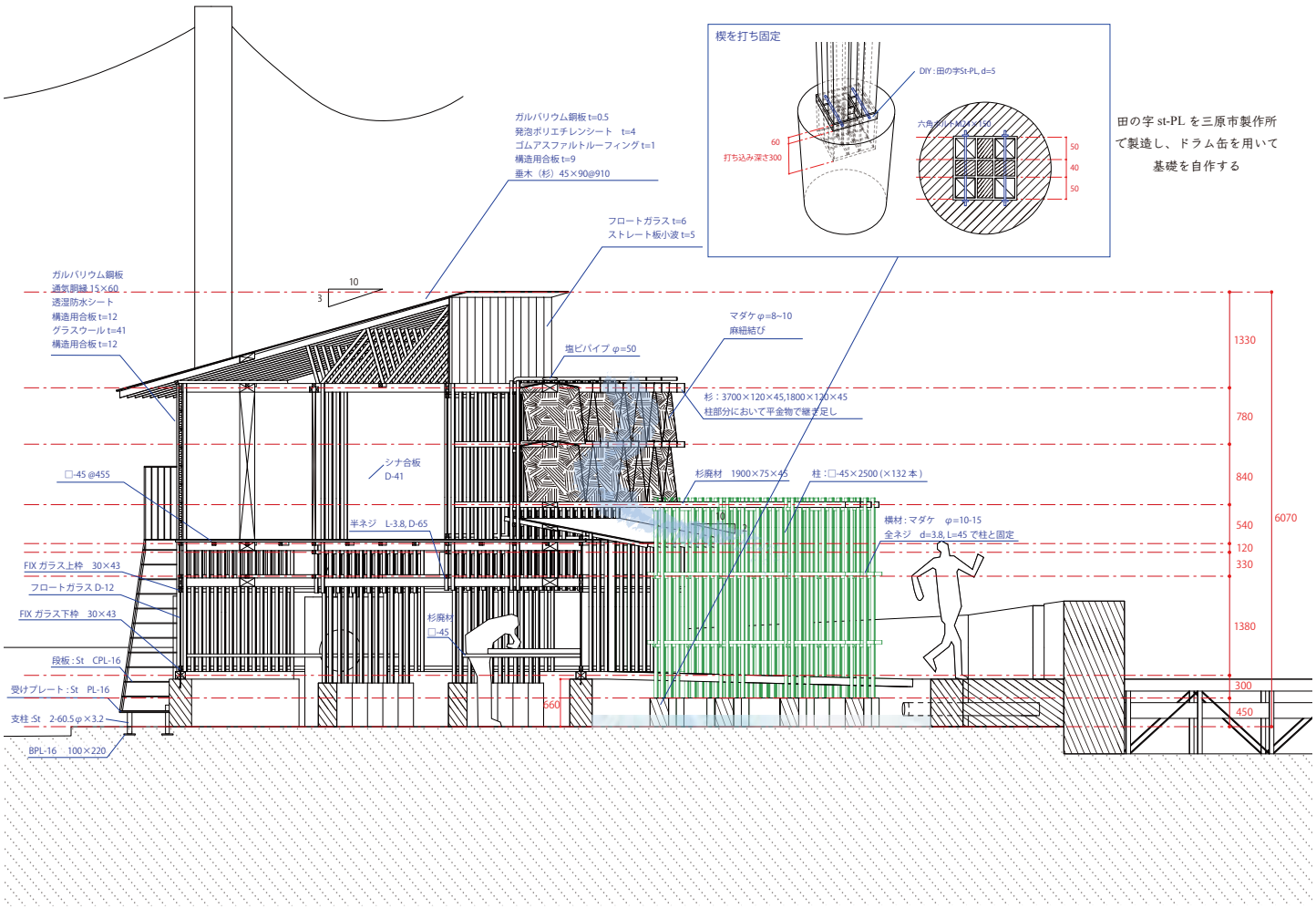
site3：塩工房ゲストハウス

敷地3は、生口島と尾道にアクセスできる港の近くに位置し、須ノ上地域の特産品である塩を作る工房を備えた民泊を設計する。須ノ上地区は塩の他に、みかんやメロン、わけぎ、その他野菜が生産されており、こうした食材を活かした料理を振る舞う場所がほしいと話に上がった。敷地は不定形な形をしており、かつて工場が存在していたが、現在は基礎のみが残っている。

site3：平面図



site3：断面パース



ハサミ柱をきっかけに竹の枝がかけられている。
その上から設備を通して海水が噴射される。

建築に掛けられた竹の枝を通してしたたる海水の滴は、
自然によって濃縮され、窓の外に幻想的な風景を作る。

建物を循環する海水や塩工房で作られる熱は
公共空間の室内環境をコントロールする。

ハサミ柱の隙間に壁を設け、自由に間取りを変更できる。
書斎は、ものを掛けてプライバシーを確保。
テラスからは海を眺めることができる。

廃材を薪にし、ボイラーで室内を温め塩を結晶化させる。
2F ではよそ者も招き入れて皆でご飯。
その様子がガラス越しに道路から見える。

月に 1 度は外に出て皆で塩作りワークショップ。
尾道港へ向かう高速船からは、その様子が見える。